WASON
HQ
1104
J74+

Feb. 2
1889

No. 147

女學雜誌

一册六錢　　版權所有

當府內無郵稅　　各土曜日出版

明治二十二年（第百四拾七號）二月二日發

社説
女子と宗教　第五（儒教）

論説
政治改良に於ける英米婦人の景況（植村正久）

批評
谷間の姫百合

叢話
痲疹の談○最も樂しき事業○佛蘭西辭別の歌

佳傳
破鏈談第一回（晩秋の氣）

小説
理想紳士（月の舎しのぶ）

寄書
文苑（二）（鈴木弘恭大人撰）

新報
當二月中○東京婦人矯風會○學士スピンネル氏、天下の女子○白哲人の禍眼○流行の破船○女子州會議員當撰○不道德なる著書特に小說○英國警戒同衆第三年會○篤志看護婦人會○其他數件

外報
ボストンの學務委員○スペイン皇子の姆○女子の職業○パットレル夫人○行狀の一等賞○ウエルス女大學○英國政壇の婦人

小供談

附錄
女子讀本○婚姻説

Digitized by Google　　Original from CORNELL UNIVERSITY

The Woman's Magazine.

(JOGAKU ZASSHI.)

No. 147. January 2nd, 1889.

EDITORIAL:— Woman and Religion. No. V.

LEADING ARTICLES:— Western Ladies and Politics. by Mr. M. Uyemura.

CRITICAL NOTES:— "Tanima no Himeyuri."

MISCELLANIES:— "A Story about Measles." "The Happiest Work." "Farewell to France."

BIOGRAPHIES. "Breaking the Fetters."

NOVELS:— "The Ideal Beau."

CORRESPONDENCES.

GENERAL NEWS.

本號より毎月初刊の雜誌に限り英文にて最近の日本女況を報じ内外に在る數多の外人讀者諸君に一讀を煩わすとしたり。

"WOMEN IN JAPAN"

(1.) Ramabai who arrived at Yokohama on Dec. 19 met with a most cordial reception from the people. She addressed a large concourse of people twice in Yokohama and twice in Tokyo, and the sympathy that her audience felt for her noble work was shown in the collection which was taken up, amountry to over 75 Yen.

(2.) Japanese young men are hastening their marriags so as to avoid the troublesome restriction which the new Law is going to put upon the ceremony.

(3.) Four young ladies who are graduated from the "Kōtō Jogakko" (Public High School for Girls.) are trying their hands at novel writing.

(4.) There are 4431 women in Tokyo who are gaining their livelihood by means of their various accomplishments. The singing girls number 1588, & the actoresses, 319.

(5.) The course prescribed by the Kōtō Jogakko is to be modified and made higher. It has extended only over 5 Years hitherto.

(6.) The tuition which has been only nominal in the government schools is to be increased after 5 years from now. The Kōtō will require 50, the "Bijutsu" (School for teaching Fine-Art) 30, and "Ongaku" (School for teaching music) 30 yen per year.

Digitized by Google

Original from CORNELL UNIVERSITY

女學雜誌　第百四十七號　明治二十二年二月二日發兌

社說

○女子と宗教、

四　儒教。（中）

（三）　愛情及び交際

儒教の愛情を說くと極めて温たかなり、其の交際を制すると極めて冷やかなり、彼の君に忠なれ父母に孝なれよと云ふは愛の尤も大ひなるものなり、其言實に切、而して三百の禮儀三千の威儀以て之を裁する所ろのものは嚴極冷絕、其法具に密にして毫末も假さず、中に就て其の愛情の尤も温たかなるは男女間の愛なり、而して之を制するとの尤も冷やかなるは即はち男女間の禮なり。云く窈窕たる淑女は君子の好逑、窈窕たる淑女は寤寐に之を求め之を求めて得ざれば寤寐に思服す悠なる哉悠なる哉輾轉反側す、窈窕たる淑女は琴瑟之を友とす窈窕たる淑女は鐘鼓之を樂しむ（詩周南）、其の淑女を慕ふとの切なる殆んど心を破らんとす、而して亦た之を懷望して云く、山には榛わり隰には苓わり云に誰をか之れ思ふ西方の美人彼の美人は西方の人なり（旄丘）此一節別に淮ありとも云ふなり　云く我を知る者は我が心憂ふと云ふ我を知らざる者は我何をか求むると云ふ悠々たる蒼天此れ何人ぞや（王一）、云く我れ見ざれば我心悅びず我見ざれば我心苑結す我見ざれば言之に從つて適ん我見ざれば云に何ぞ盱まん（都人士）、其の戀思の切なる實に極まれりと云ふべし。之を以て、齊の宣王孟子に謝するに寡人色を好むと云ふとき、孟子對て云く昔し大王色を好み厥妃を愛す詩に云く古公亶父來り朝たに馬を走らせ西水の滸に率がひ岐下に至り爰に姜女と共に來り胥ひ宇ると王如し色を好み百姓と共に之を同ふせば王に於て何か有んと、孟子は即はちたゞに宣王が色を愛するを尤めざるのみならず、併せて百性の惣ても亦た之を愛せんとを望み、而して王と百性と上下とも〳〵之を愛せんとを望めり、實に是れ孔子の教にして儒教が男女間の愛情を見ると之を以て眞面目とはなす也。

一方には此如くに切なるを以て眞面目とする男女の愛情をば他方に於ては儒教は抑そも何如に之を制する乎。禮に云く男女七年にして席を同ふせず食を共にせず（內則）、男子は外に居る女子は內に居る宮を深ふし門を固ふし閽寺之を守り男は入らず女は出でず（內則）、祭に非ず喪に非ざれば器を相授けず其の相授くる則はち女は受くるに篚を以つてす其の篚なければ

則ち皆あ(男女各々)之を(地に)奠て而して後ち之を取る外と内とゐどを共にせず湯浴を共よせず寢席を通ぜず乞假を通ぜず衣裳を通ぜず男子内に入ては嘯ふかず指ざゝず夜行くに燭を以てす燭なければ止む女子は門を出れば必らず其の面を擁蔽し夜行くに燭を以てす燭なければ即はち止む道路男子は右に由り女子は左に由る(內則)、男女雜座せず親から授けず行媒あるに非れば相ひ名を知らず幣を受るに非れば交はらず親しまず(曲禮)、其の男女の別を制すると如此く嚴あり。故に男女の別は君臣の義父子の親長幼の序朋友の信と共に至大の禮法にして若し人之を破れば即はち禽獸に近づくもの也、之を以て淳于髡孟子に問ふて嫂の水に溺るゝとき之を援るには手を以てすべきや否やと疑ふに至り、孟子は則はち之を辨じて之れ禮文に反くと云へども一時の權道として手を以て援くべし事の急なれば也と答ふるに至れり、左れば男女は夫婦にあらざれば相ひ交はる可らず、然に夫婦の相ひ交はる倘殆んど他人の如くにすべしと云へば、況んや男女相ひ手を携へ相ひ抱き例へば同伴同遊もしくは踏舞遊樂するが如は實に昇儒敎の禮に於の禽獸たるもの也。女大學は此義を祖述して云く、女は父母の命せと媒妁とに非れば交はらず親しまずと小學にも見えたり假令ひ命ちを失ふとも心を金石の如くに堅くして義を守るべし。何如なる用ありとも若き男より文あど通はす可らず。

(四)　結婚及離婚

婚姻は儒敎に於て四大禮の一つたり、之を以て其の婚姻の禮儀に於て多くの戒しめあるは固より論あく、先づ婚を定るに先だちての用意甚はだ綿密なり。論語に云く、公冶長縲絏の中に在りと雖ども其罪に非ざる也と其子を以つて之に妻あはす、南容は邦に道ある時は廢られず邦に道なき時は刑戮に免かれんと其の兄の子を以て之に妻あはす(公冶長)、擇ぶ所ろ宜しきに適ふと云ふべき哉。」然れども抑そも婚姻なるものは何の爲に致す者なりやと問へば、儒敎は之に答へて只だ後あらんが爲めなりとこそ云はめ。孟子曰く不孝に三つあり後を無くすを以て大なりとすと、故に婚姻の主ある目的は此に於て不孝ならざらんとするにあり。之を以て禮の大戴禮に云く、婦に七去あり、子無ければ去ると、子無き故に則はち去るとを許すの婚姻は少くとも子あらんとを以て婚姻の大ひなる目的とするとを知るべし。此外か婚姻の目的とするに更らに一ヶ條あり孟子云く仕るは貧の爲にするに非ざる也而して時あ

つてか貧の爲にす妻を娶るは養の爲にするに非ざる也而して時有つてか養の爲にす。此故に儒敎に於ける婚姻の大目的は子を擧んが爲め也、其の時あつての權道は生計の爲め也、と論定することを得。

婚姻の禮儀に就ては極めて綿密なる式あり、詩に云く妻を娶る之を如何ん媒に非れば得ず、又云く妻を娶る之を何如ん必らず父母に告よ、故に先づ仲立あり又た父母の許しを受ることを切要とす。禮に曰く婚禮は禮の本也(婚義)、父子に醮し之に命じて曰く往て爾の相けを迎へよ我家事を承けて勗め帥ふに敬を以てし先妣に之れ嗣がしめよ若ち則ち常有り子の曰く諾唯た恐らくは堪へざらん敢て命を忘れずと(儀禮)、而して女の嫁んとして出るや、父は女を送りて之に命じて曰く之を戒しめ之を敬しめ夙夜命に違ふ勿れ母は衿を施こし悅を結びて曰く之を勉め之を敬して夙夜宮事に違ふ勿れと(儀禮)、斯て禮に順つて婚し齋戒して鬼神に告げ酒食を爲りて鄕黨僚友を召く、式法嚴密眞に人世の大禮に適ふものと云ふべし。

婚后妻が夫に仕ふるは天の如くすべし、其姑舅に仕ふるは更らに一層の上天の如くすべし、而して女子は一度び嫁すれば后ち決して復たびせず、忠臣の二君に見えざる如く其の二夫に見えざるは即はち最高の女德たり、然れども其の離緣せらるゝに至つては極めて容易なるが如し、孔子曰く婦に七の去るあり、父母に順はざれば去る、子無ければ去る、淫なれば去る、妬めば去る、惡疾あれば去る、多言なれば去る、竊盜すれば去る(大戴禮)。

此故に儒敎に於ての婚姻には男女二人と云へるものゝ外に左の三事物を入れて考ふるを禮とす、曰く家の血統曰く父母の命並に愛憎曰く妻の成行。家の血統を重んじて婚す、故に若し子なければ去るを得る也、父母の命並に愛憎を重んず、故に父母に許されずば婚するを得ず父母に愛されざるの妻は之を去らざる可らず、妻の成り行きに由て出入す、故よ最初溫和しきと思ひて娶りたりとも若し妬むか多言なるときは則ち之を去ることを得べし。一言するに儒敎の婚姻は男女二人の靈魂及び愛情の上に重きを置くにあらず、之を家の爲に父母の爲に一箇の義務なりとして結緣せしむるもの也。

(五)　一夫一婦

婚姻の目的すでに前に述る如くなれば、一夫一婦の制は固より行はるべきにあらず、たゞに行はれざるのみならず反つて后あらんことを切望して一婦多妻の仕組を採用したり、之を以

て其の尤も多く後あらんとを切望せらるゝ所ろには婦の數尤も數多く、其の後あらんとを切望せらるゝの度極めて少なき所ろに至り初めて一夫一婦の仕組を見たり、左れば天子の后六宮を立つ三夫人九嬪二十七世婦八十一御妻以て天下の内治を聽き天下の男數を明らかにす(昏義)と即はち天子には一百二十婦人あり、諸侯には九夫人あり、大夫には數婦人あり、士には妾あり、庶人に至つて初めて一夫一婦を見る也。故に云く妾媵數あきは人に敎ゆるに亂を以てす且つ貴賤等あり一夫一婦は庶人の職なりと、禮に妾を入るゝの占ひを示す妻妾を並べ置くは固より不可なしとする也、故に吾人は儒敎を通じて一夫必らず一婦人を妻とするの敎理あるを認めず。

(六)　室家

大學中庸論語の三書數たゝび詩を引いて切りに室家の和樂するとを敎ゆ、其一に曰く故に國を治るは其家を齊ふるに在り其の父子兄弟たる法とるに足りて而して後ち民之に法とる此を國を治るは其の家を齊ふるに在りと云ふ也、蓋し天下を平らかにし一國を治むるは其元と家の齊ふに在りと云ふ、即はち室家の和樂を大切にする所以なり、詩に云く桃の夭々たる其の葉蓁々たり之子于に歸ぐ其家人に宜し、又云く妻子好く合へり琴瑟を鼓くが如し兄弟既に翕へり和樂して且耽しむ爾の室家に宜し爾の妻孥を樂しむと、儒敎の室家は是れ幸福なるホームなり。

然るに儒敎は何如にして如此く室家を幸福ならしめ得るかと云はゞ、之れ其の家人の一部分をして他の一部分に曲從し僕仕せしむるにある也、禮記に親子間の禮を細述し、又た婦が姑舅に仕ふるの禮及び夫婦相ひ別るゝの禮を嚴密にせり、而して又た云く、

子婦の孝なるもの敬なるものは父母舅姑の命に逆らふ勿れ怠る勿れ内則

禮は夫婦を謹むに始まる宮室たり外内を辨ず男子は外に居り女子は内に居る宮を深くし門を固くし閽寺之を守り男入らず女出でず男女椸枷を同ふせず内則

三歳婦と爲つて室を勞とせず夙に興き夜に寐て朝たあるとなし詩碩人

閨門の内禮を具うる哉父は嚴にし兄は嚴にす妻子臣妾は猶ほ百姓徒役の如し孝經

故に儒敎の室家は一の小專制國なり、妻は之が婢妾の如し、固より茲に和樂あらん只だ女性の曲從するが故あり、茲に琴

瑟あり其音悲し、一家秩然たり其氣寒し。

（七）　夫婦

男は天にして女は地なりと云ふ、此の男女の相婚して夫婦と爲りたるものは即はち天地の關係あるべき也。男女の別あるは人倫の大禮なりと云ふ、此の男女の相婚して夫妻と爲りたるものは即はち亦た大ひに其の別を重んずべき也。婚姻の目的は主として家を嗣ぐ後を立つるに在りと云ふ、如此き目的に役せられて夫婦と爲りたるものは其交際固より知るべきなり。而して男は天と爲り家の宗と爲りて且つ七去の權を握ぎり、女は地と爲り家の婢となりて只だ七去せらるべきの義務を負へり、如此き因縁によりて成れる夫婦は其の關係の極めて悲しむべきものあると固より當然なり。

儒敎に適する所ろの室家は冷やかなると氷室の如くならん、此に尤も權力あるものは即はち姑舅これ也、夫婦恰かも食客の如くに玆に寓居す、而して特に其の婦は此の食客中の劣等者なるが故に、儒敎的の妻は恰かも是れ一家中の陪臣の如し、其良人の氣嫌を伺ふが上に、先づ以て姑舅の氣嫌を伺ふべし、姑舅と良人との御氣嫌に適ふ甚はだ美わしくして而して能く閨門中に閉居し、一物一品を使ふも之を專らにせず、例へば一々之を賜はつて而して後ち之を用ゆるが如くすべし。故に儒敎に伉儷の和樂を尊むと淺きにあらずと云へども、然も其の和樂の由て來るは妻が只だ從順にして曲從し婢事するに在るが如く敎たり、此義を解釋したる書に云るとあり、即はち

女小學に云く、夫は天にたとへ女は地にたとふ左れば夫の貴き事天の高きが如し妻たるものゝ心得あり夫婦と思ふ故にあるゝに從がひて敬まひに怠たり心ざしにも逆ふぞかし始より終まで主君と思ひつゝしみ仕うまつらば過まち少なからん。

女大學に云く、婦人は別に主君なし夫を主人と思ひ敬まひ愼しみて事ふべし惣じて婦人の道は人に隨ふにあり‥‥夫も腹立ち怒る時は恐れて順ふべし怒り爭ひて其心に逆ふ可らず女は夫を以て天とすかへすゞも夫に逆ひて天の罰を受く可らず。

内則に曰く子婦に私の貨なく私の畜なく私の器なし敢て私に假さず敢て私しに與へず、凡そ嫁は私室に適けと命ぜられざれば敢て退かず將に事わらんとす大小必らず舅姑に問ふ、故に儒敎の婦人は一家の女王に非ず即はち一家中の下婢長たる也。

（八）母子

儒教に於ける母子の關係には一種の奇觀ありと云ふべし、詩に文王の母を稱す、文王の母は所云る胎教を重しとし其胎内に之を懷くとき極めて愼敬なりしと云へり、之を以て爾來胎教の事甚だ重んぜられて禮に其の心得を細述したるなり、然るに既でに一旦之を出產してよりは、兒子を宜しきに教ゆるの任多くは父に存して母に在らず、故に母は之を胎内に懷くの日たゞ戰々兢々として其子を惡しくせざらんとを愼しみ既に之を出產せば即ち之が一種の保姆とあるのみ、彼の教戒教育の全權の如きは一に父の手中に執らる。

然れども儒教の母亦た自から教戒教育の任に當るとあり、即ち夫死して兒の遺されたる時なり、此時に當りては母は亡父の任に代りて其子を教ゆるの全權を握る、此に於てか所云る孟母の如きあるなり。之を以て儒教の賢母は多くは寡婦なり、夫死して后ち初めて母たるの感化行はるゝあらん、若し夫れ良人の存するならば、母は是れ尙ほ一家中の下婢保姆なり安んぞ其子を教ゆるの權あらんや、故に云く儒教の母は未だ子を產まざるの前に於て及び夫すでに死せるの后に於て初めて兒子が母たるを得ると云ふべし。

論說

○政治及び社會改良に於ける英米婦人の景况

植村正久

左は去る廿五日明治女學校文學會に於て英米漫遊より此頃歸朝せられたる植村氏が演說の大畧を筆記したるもの也。

今日、英米に於て私しが目擊したるもの、一斑をお話し致しますに付て、一言預じめ申置かねば成らぬとがあります、夫はアナタ方に向うの風俗を何でもかでもすつかり眞似を爲されと云ふのでは無い、近頃ろ國粹保存主義と云ふとが日本の社會に幾分か行はれて居る、此の論の起るのも即はち餘り何事に由らず西洋の眞似をするとを慣ふつたるものである、私しは元來西洋の事を悉く摸倣せんとするものに甚だ不同意でありました、其の氣性は今日も尙ほ持て居る、此のお話しを爲るに付ても尙更らよ固く胸中に疊んで居る、私しが歸途神戶に着ました時に早速近比ろ流行すると云ふ草双紙を買求めて、所云る小說を讀ました、之は新聞紙にも評判ありて一軌軸を出したとの著作であると云が、其中を讀で行くと、下女が旦那の洋服を着換る手助けをしてヅボンのボタンを外すと云ふとが書いてあつた、幾ら細かいとを寫す西洋小說の眞似をすればとて、下女がヅボンのボタンを外す手助けをす

るとは驚ろくべきとである、斯の如く西洋の眞似を爲し、西洋の風習と思ふものを輸入するには、余程の用心を爲ねば成らぬ、故に私しが今日のお話しをするに付ても此の覺悟は深く心に覺悟いたして居る。

今日は婦人が社會改良と政治の上に關係して働らく所ろの事に付き、英米に於て見たる所ろの一部分をお話ししたいと思ふ、其外の事は亦た他日申しませう。

アナタ方は御承知であらうが、西洋では酒を飲むの弊害が甚しく行はれて居る、日本では見ないが、先づロンドン、ニウヨウクなどの市中を歩いて酒屋の前を通ると、中に成程多くの男が酒を飲で居る、男が酒を飲むのは敢て奇しむに足らぬがよく〳〵見れば十三位の子供よりだん〳〵と大いなるもの、二十三十四十五十と色々の年配の者が飲んで居る、更に甚はだしきは彼の女が立つて飲んで居る、飲む所ろはブランデー、ホイスキー、ビーアの類で、凡そ西洋に於て男女共に酒を飲む者の多いのはビックリするほどである、先づ英國に於て年々酒の爲に遣ふ金は、人の魂しひを救ふ所ろの入費に、凡そ七十倍殆んど百倍して居る、酒の流行すると實に驚ろくべきである。其外又色々の惡事がある、先づ二三の例を擧れば、小さい子供を雇ふて子供演劇をすると日本などよりも餘程流行する、ソコデ段々と妙齢の男女を仕込みて色々の處作をさせる、然るに此の子供が成長するに随つて外に何の業も覺へず男はナマケモノとなり必竟社會の厄介者社會を害する所ろのものとなり、女が又斯して成れる果ては、即はち女郎彼の惡むべき卑むべき所ろの業を行ふものとなる、實に困つた譯である、然るに此の如くに墮落するものが餘程多い。

此の如き社會の弊風に對して、色々と心配して働らく所ろの人がある、どうも早く酒を止めて貰ひたいと、其爲に色々と骨を折て居るものは即はち女である、固より男も之に盡力して居る、然し彼の禁酒會若くは節酒會や、西東をも辨へ知らぬ子供等を誘ふて惡に陷るものを歎き救ふ所ろの先鋒に立つものは、即はち女である。私が倫敦を立少し前に、ナショナル、ビジランス、アッソシエーションと云ふ會の會議に行て見ました、之は國の用心警戒をする會と云ふ名目の會であつて、例へば玆に何の舍主人と云ふやうな特更らに風俗に害ある小説を作つて出したものがあるとすれば、直に此の會から政府に訴へて其書の販賣を禁ずるとを請ふとか、又は或る男が其家の下女と密通し此下女を只ならぬものとして而も放擲し顧

みぬと云ふ如きとのあつたとき、此の下女を保護して金を出して政府に訴へ其の弱くて主張しがたき權利を助くるとか云ふやうなもので、此の會はまだ出來てから僅かに三年にしか成らぬ。佛蘭西にゾラと云ふ人があつて、連りに惡い小説を書いた、其小説には裏店の魂膽より惡いたわむれたる遊び事の類を盡してあるので、之を讀む所ろの者は男も女も遂に惡るい宜しからぬ心を起すと云ふやうな書物である、然るに先頃ろ英國の人が之を反譯して或る本屋が出版した所ろが、大層に廣く賣れた、因て人民中大に激するものあつて遂に昨年の冬國會の議決によりて此の書の販賣を禁じたが、夫は即はち彼のナショナル、ビジランス、アッソシエーションから訴へたに由るのである。而して之に盡力する所ろの者は即はち女であるので、つまり婦人と云ふものは、固より其中にも惡しきものもあるが、然し道德仁義の行わるゝが爲に色々と運動し奔走する人の先鋒に立つ所ろのものである。

ロンドンの市中を歩くと、日本橋通りを通うやうな鐵道馬車の類のものがある、之に上下の二階ありて、階子を上つて二階に上るやうに成て居る、或夫人の話しに、數年前迄は女が上の二階に上ると云ふとは無つた相です、然るに近來は女が多く上に上つて往來するが、其元因を尋ぬるに、もとは彼の階子が余程危なく出來て居たので、危險だと云つて上らなかつた、夫も一つの元因であるが、其上に更に一つの元因があつた、即はち元は女が二階に上ると云ふやうなことはチテンパらしひと云ふので、世間の評判の爲に上らなかつたのでもある、然るに近頃ろは輿論が一變するに至り今では二階に多くの女を見るやうに至つた。斯の如く英米には、常に引込んで小き家の内よりは出でざりしものが、常に社會の裏面に立て寵りしものが、必竟其階子の便利になりしにより、世間の評判の變りしにより、色々の事業に盡力するに至つたのである。

然し乍ら又玆に一つ特別の運動を起させた元因がある、初め婦人達が世を改良する爲に惡風を矯る爲に骨を折つたのは、宗教と道德との力によつたのである、人の本心に訴へる、宗敎の主義に導びかれる、色々と其樣なる靈の上なる無形なる本心に屬する所ろの力を假りて社會を改良しようと骨を折た、然し社會の改良はたゞ此丈では行かぬ。孟子曰く仁義なくば上下亂る、政治なくんば財用足らずと、吾々が酒に對する運動も、男女の交際惡風に對する運動も、道德を根本とし、眞理に基づき、靈の本心に訴へ、人類の力を借りて進むべきと

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

であるが、然し之ばかりでは行かぬ、例へば酒屋を亡ぼすにはたゞ一篇の議論一片の至誠の心のみでは行かぬ、即はち政治上の權を用ひねば成らぬ、一躰政治とは大邊の力あるもので、即はち大事業を爲す爲に、神が人類を救ふ爲に、授け、助け、祝し玉ふ所ろの大ひなる手立である、然るに政治を置いて只だ其外の事にのみ由つて運動せんとするは、兩手あるものが片手で働らき、兩輪あるものを一輪で車を廻わすに同じとである、つまり人間を改良するには神の授け給へるあらゆる力を用ひねば成らぬ。今ま一例を擧て云へば、ロンドンに大相の貧乏人がある、其の元因は色々の事に由つて出來たのであるが、一つ部屋に多くの家族が混雜して居る貧乏人の慘狀は中々東京などの貧人の比ひでない、夫等の婚禮は極めて卑しく、夫等の子を生むとは鼻もちが成らぬ、夫等の道德は聞くに堪へぬ、夫を救ふ爲に敎會の人は神に祈る、何卒之を救ひ玉へと祈るのみならず、又多くの金を集める、彼の仁人義士が年々之に費やす所ろの金は何千萬圓の上に登るであろう、然し之を見るに燒石に水の如くである、實にたゞ道德宗敎の力のみでは變はらぬ、病氣を一つ直せば直ちに病氣が起る、故につまり此の社會の人を救ふには政權の上政治の上にも大變動を與へねばならぬのである、即はち一方よりは靈魂の力を假り、又一方よりは政治や理財の上よりして進む、所云る仁義なくば上下亂る、政治なくば財用足らずと云ふ、此の本文が實に眞理で、此の如くにせねば決して社會改良は出來ません。(未完)

批評

○谷間の姫百合　末松謙澄譯　金港堂出版　忍

第二卷が出ました、趣向は前よりも變化が多く隨つて面白みも前より切で、文章は余程綺麗になり伯爵夫人が書生流の言葉を使ひたるやうな不都合は全く見へず爲つた、西洋の高尙ある感想は十分に現われて、名こそ日本人あれ全く西洋流の人物が運動するやう感ぜらるゝは、譯者が才力の致す所ろと例の如く敬服す。景色を寫す所ろ亦た巧みにてはあるが、餘り和文めきて下手な歌人の筆法に似たり、畫は別段よくも見へず、製本は隨分に淡泊、寧ろ粗雜である。

小說の一つの効能は、無形抽象的の志想を實物に仕つらへ、之に肉を附け、生氣を吹込み、丸るで生きたる人間の如くに立働らかせて人を敎ゆるにある、例へば馬琴が八犬傳を作つ

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

て仁義八行の德を實際に示したる如き、又たポンヤンが天路歷程を作つて信徒が經歷を示したる類ひ、皆な是れ無形の志想、死したる道理を生かして、恰かも之を世界に存する實際の人間なるかの如くに現はしたるものである。故にペスタロッチは之に據つて教育の新議論を現はし、ユーゴは之に據つて政府の暴虐を訴たへ、ゼヲヂエリヲツトは之に據つてコムトの哲學を現わし、マダムデスタルは之に據て民權の自由を訴たへたり。小說の主なる効能は美術としての効能であらうが若し何如なる目的を定めて之を作るかと云へば、即はち斯の如き高尙潔白なる目的の爲めに作らるゝことが實に望ましひので、彼の徒らにアラを書き、喝采を拜し、黄金を祈禱するやうなる作者は、何卒此新日本の新時代に起らせたくない。故に吾人は兼ねてより希望したり、斯の如く小說の流行する世の中となつたならば、何卒仁人君子も亦た淸潔なる小說を作つて、其の高尙なる志想を世上に現はして貰ひたい、啻に其の志想をムキ出しにして現はして貰ふのではなく、之に肉をつけ、衣物を着せ、一個の生きたる人物として現はして貰ひたい。左りとて御當人が無遠慮に書中に現はれ玉ひ、堂々として十數枚の演說を爲さるが如きは餘り感服せぬが、どこ迄も小說の資格を保ちつゝ、扨て隱然と、知らず〳〵其の志想を吹込むやうに作つて戴きたい、固より六かしひが決して出來ぬことではない、イヤ今日の諸才子位ひに骨を折つたらば決して六かしひことでもあるまい。

而して斯る志想が現はして戴きたいと申すの一ヶ條に、先づ西洋の高尙なる志想が我國人に多く覺らせたいと思ふです、吾人は固より西洋人の行ひに感服せぬことが多くある、が然し彼等が其美として感ずる所ろ、其の高尙として慕ふ所ろ、即はち其の尤とも立派なる理想として理想する所ろの者に至つては實に感歎するです、故に如此き理想を我國人に多く悟らするやうにすれば、我國の文明を進るに亦た大なる助けがあらうと信ずる。此迄の日本の洋學者は重に變則讀の學者で、即ち文典地理から直ちに飛んで、歷史政治書經濟書等に移り、頭まに屬する所ろの固い書物許りを讀んだのである、故に西洋の美しき、高き志想、即はち心に屬する所ろの、家內に屬する所ろの、社交上に屬する所ろの美しき高き志想に至ては餘り御存知ないです、故に如此き志想を今の國人に多く知らするは一つの有益なる事業で、夫れには西洋の高尙なる小說を譯するが極めて手早き方法であらうと思ふ。

(一〇)

夫に付ては此の谷間の姫百合の如き小説が實に効能あるので凡そ此書中に現はれたる人物は大抵美です、啻に美なるのみならず、多くは日本に無いやうなる一種の美を保て居です。有洲伯の嚴正、同夫人の温巧、成人の果斷、春枝の眞實、虎子の淡純、半三の執心の、如き、固より似ては居るが日本國には未だ餘り類の無い氣質です、而して公平に評すれば實に日本人中には中々此樣な人物が少ないです。

特に全く西洋の風俗を知らぬ、所謂る男女同等の習慣に慣れぬ人々が、此書の樣なる西洋の小説を讀むときは、大ひに感心することがあらう、例へば第一卷に有洲伯が同夫人ヱ對するの尊敬及び成人と春枝との交際の如き、第二卷に成人が春枝に謝す所ろ、及び虎子に對する所ろの如き、何れも男女間の同等なる交際、別言するに男子が女子を敬愛する所ろの優待を現はして居る、此れ等は實に我國に少ない所ろで、之れを現はして讀者に女學上の利益を與たふることと眞とに夥しきと思ふ。

士君子が當今の小説社界に對するの責任につき、兼て右樣に感じ居ましたが、谷間の姫百合を評するに及んで、思はず平日の懐ひを述ました。

叢話

○麻疹の談　此頃ろ中々流行する也

山下石翁

此頃ろハシカが流行るとて或る女學校などは之が爲めに休校せられた程です。然しよく〳〵見聞すれば、どうも眞のハシカでは無いやうで、云はゞ類似のハシカとでも申すか、又は其他の熱病の類であらう。然し何れにしても大抵ハシカの類ひであるから、先づハシカの事に付き少々お談して多少の御注意を申さう。

一體ハシカと云ふものは一度すれば二度はしない者です、然るに此頃流行するのは既に一度患ひたものが復た煩らふのであるから、何分ハシカとは思はれぬ。或人は猩紅熱の類ならんと申しますが、猩紅熱はまだ日本に稀なので、前年芝區に一人、下谷區に一人あつて、初めて我國にも亦た之があると申したる程で、云はゞ少ないのです。然し若し猩紅熱ならば大變の事です。

痲疹の性質　痲疹と書くのは、ハシカの出た所ろを見ると、恰ど麻の實を散した樣に見へるからの事で、之は大抵八年目乃至十二年目に流行するです、其流行する前には、氣管支カタルと云ふ惣べて寒冒の類の病氣が先づ頻りに流行るです、

而してハシカの行はるゝは大抵秋から冬の間だけで、元來傳染病の一種であるが其傳染する病元は未だ分らない、然し何にせよ極微かな有機躰の類で、夫が病人の息氣や、發汗や、涙、唾、鼻汁の如きものに混じて居つて他にウツルのに違ひない、甚はだしきは手帋に、書物に、衣物になど附いて居て外に傳染することもあらう。

誰にも傳染する事　病氣の起るには素因と云ふものがあるので、先づ肺病を病と云へば、其人には生來肺病になる傾むきがあるです、夫故丈夫な人でどう肺病になりたいと云つても成れぬ人がある、即はち肺病の素因なき人もあるです、然るよハシカに至ては何如なる人にも其の素因があるので、凡そどのやうな人でも皆な一度はハシカに罹らねば成らぬやうに躰だが出來て居る、何人もハシカと云ふ火の附く所ろの火藥を抱いて居ります、固より此火藥に火を附ずに濟むこともありませうが、若し無用心に近づけば、誰れでも、何日でも、皆なハシカの火につかれるのです。然し尤も多く傳染し易いのは二歳より八歳迄の間だで、乳呑兒の一歳より二歳未滿のもの、又は老年の人々には傳染することが極めて少ないです。

麻疹病の經歴　凡そ病ひには攻撃の時、陣取の時、退軍の時と以上三つの時代がある、ハシカも亦た其で、凡そ其の病元を身にうけてより十二日乃至十四日の内は、此の病元切りに躰内を攻撃して其の種を殖して居ます、故に此の攻撃せられつゝある時に早く氣が着けば病ひも極輕ろく濟ので之が實に心掛くべき所ろであるです。然し之を悟るとは中々六かしひ殆んど寒冒と同じやうな心持がして別に變つた感じもないやうである、然し寒冒の時にはセキも出る涙も出る鼻汁も出るが目がマブシヒやうなことは無い、特に寒氣がしても只だ一寸の事で左樣に長くは續かない、然るにハシカの時には風を引いたやうな心持がする上に、目がマブシヒ、又切りに寒氣がして其寒氣が甚はだ長く強い、其上頭痛がする、胸が惡くなる、遂に發熱するに至るです、故に能く考へて之は並の寒冒ではないと思つたらば直樣醫師に掛つて、先づ彼の攻撃の時代に防禦するのが肝腎である、既に城を取られて仕舞へば最早や仕方が無い。」然しすでに發熱がした、頭痛が烈しくなつた、鼻血が出た、胸が大層に惡くなつた、特に三四歳の子供には手足が引つける、斯樣に成れば即はち最早や落城したので、所云るハシカの本陣が躰内に陣取られたのである、スルト先づ顔から疹が出初める、一晝夜又たは一晝夜半の内に

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

全身に悉く出る、二日目に至り熱が尤も高くなる、寒冒では三十九度よりは高くあらぬが、之では四十度位ひになる。扨て二日目に全く出て仕舞つて、斯くて、一晝夜を過せば、之より段々と消へて五六日目にそろ〳〵陣を退くるに至る、所云る退陣の時にうつるです。」三日間に追々と疹が消へて遂に全く無くなる、凡そ之を感じ初めてより四週乃至六週にして全く愈ゆるです。

危險なるかの事一度は大躰ハシカに罹る位ひで何も心配する程の事は無いと云ふのが大層な誤まりで、成程素直なハシカは決して恐ろしくないが、質のよくないものは隨分之が爲めに死を招くとがあるです、特に合併症と云つてハシカと共に起る病氣がある、例へば肺病、馬皮風の如き病ひが之から起るとがあるゆゑに、決して之を輕んずるとなく、よく用心して治療せねば成らぬ。

豫防法　は先づ風を引ぬやうにする事、食物に氣を着けよく運動する事です。またすでにハシカを患ひて居る人の所ろへは成るべく行かぬやうにするとです。

治療中　病氣中は風通りの善い室に入れ、看病する人丈け出入して其外の人は這入らぬやうにすべし、病人の食物や道具は一切別にして、特に病人の汗や鼻の附たるものは悉く燒棄つるか、又は消毒法を行わぬ中ち外へ出す可らず。病人の所ろへ來たりたる菓子などを枕元に置き、二三日して外へ出して客に馳走するなどの事が隨分にありますが、之は實に恐ろしひとです、何卒此やうな事は一切の傳染病者を取扱ふ所ろに於て決して爲すまじきものです。看護人は能く用心して病人の樣躰を認ため醫師に申すべし、特に餘りせきをしたらば早速知らすべし、肺病に變化するやうの事あらんとを恐るゝゆゑ也。

○最も樂しき事業　かすみ

經に曰く、此に瘋癲を病たる者を四人に舁せ耶穌に來れるものありと、之を解するものありて云へらく瘋癲とは即はち世上のあらゆる困苦難澁に喩ふ、四人にて之を舁とは即はち此の困苦難澁の人を救ふに比すべし、思ひ見るに天地間に美なるもの多し、花の如き露の如きは其淸きものなり、彼の燦たる星辰天に散じ、巍々たる大山の雲間に聳ゆる等、亦た是れ其の甚はだ高尙なるものあり、左れど茲に其の尤も美なる尤も淸き尤も高尙なるものを何ぞと問はゞ、余は即はち人を助けんとする人の心に過たるはあらじと答ふべし、余は天地

の美妙を觀じ得べく造られたるを感謝す、余は天地の道理を悟り得べく造られたるを感謝す、左れど尤も多く人類相助くるの愛念を與へられたるを感謝する也、嗚呼上帝天にあり困苦難縱の人地に呻めく、天に從つて之を救ふものは豈に吾等が務めにあらずや。歌に云く、

夙く働らけよ、夜は來るぞ、朝たの中に働らけよ、露の白玉かゝやく間に、花の中にも働らけよ。

○佛蘭西辭別の歌

佛國　ベランヂエー作
日本　宮本天籟譯

マリー、スチュアルは蘇格蘭の王ヂヤック五世の姫君にして幼なき時より佛蘭西王の宮中にて養はれ後佛王フランソア第二世の妃となり琴瑟相和し偕老の契淺からざりしに幾程もなくフランソア死してければマリー寡居したりけるに偶ま本國の亂出で來り已を得ずして國へ歸り王位につきたり後ち叛人のために逼まられ英廣蘭の女王エリサベスの傍に出奔しけるに英王は無慘にも懷中の鳥をば幽獄に投ずること十九年に及び遂に之を刎ねたるぞ恐ろしといはんも中々おろかなりマリー人となり稟性聰鋭慧淑にして慈悲の心深く文學の事にもおさ／＼秀でたり其の佛國を去る折には情思纏綿として追戀の情に忍びずカレーより船出する時に幾度か跡ふり反りて「佛蘭西よ／＼最早汝を見る能はず」と云ひつゝ瀧なす涙を灑ぎしとなむ其刎ねらるゝ時には動作しとやかにして少しもおづる氣色なく死に就けりとぞ千年の下其事を聞くだに酸鼻の限りにぞありける此詩は十八世紀佛國の詩人ベランヂエー氏の作にしてマリーが當時辭別の時の心根をおしはかりてものせしものゝ氏の詩は艶麗にして纎細に風俗人情を描出するに巧みなり今余が枯淡の筆をもて其詩を譯するにあたりて筆硯を焚かむとするの憾はやま／＼なりきされば措辭の整はざると意の達せざるとは偏り譯者の責になむ讀者之を諒しねかし、天籟生識。

いともたのしき佛蘭西よ、いともかあゆき佛蘭西よ、幸も澤なるむつきの中に、はぐくまれにし國なるを、跡に見なして行今は、是ぞ此世の辭別、異國なるも本國と、思ひしものを寃枉の、神の祟か今更に、浮涙となる身のつらさ、憐れと思へ佛蘭西よ、マリーか今わの辭別、いでや船路の追風よく、頓て海邊を離れつゝ、遣る瀬方なき此の思、神も憐れを垂れ玉ひ、波靜やかに彼岸に、返らせてたべのふ神よ、」

いともたのしき佛蘭西よ、いともかあゆき佛蘭西よ、幸も澤なるむつきの中に、はぐゝまれにし國なるを、跡に見なして行

今は、是ぞ此世の辭別」、

光まばゆき姫百合の、衣紋(佛國王の衣紋ハ百合あり)纏ひし其折に、可愛き民の眼には、人の浮世に此上もなき、至尊の列にいやまして、我身の春の娯樂を、たゝへしものを形なや、月影暗きエコッス(スコットランド)へ、歸りし後ハ萬乘の、位を蹤むも何かせん、只に此身の思ひ出に、いとしと思ふ佛人の、上にたゝまく願ふなれ」、

いともたのしき佛蘭西よ、いとも可愛き佛蘭西よ、幸も澤なるむつきの中に、はぐくまれにし國あるを、跡に見なして行今ハ、是ぞ此世の辭別」、

智惠に譽に情愛に、えいくらしたる昔こそ、今ハなか／＼仇なれや、草莽しげきエコッスへ、移り變るぞ運の路、憐れ墓なき身の果ハ、胸の有や無やつもり來て、言ふもおそろし夢の中、見しハたしかに斷頭機、我を無みせん巧みとハ、あな忌わしの前徵なれ」、

いともたのしき佛蘭西よ、いとも可愛ゆき佛蘭西よ、幸も澤なるむつきの中に、はぐくまれにし國なるを、跡に見なして行今ハ、是ぞ此世の辭別」、

世ハ刈菰とみだれゆき、烽燧されなる其中に、實にも尊ふときスチュアルの、姫君とてきこへしハ、住にし國を離るゝハ、物變事の限りとて、涙そゝぎし其折と、おなじ心根に佛蘭西を、朝な夕なに望むらむ、さるに詮なき捨小舟、早や乘り出る沖の中、空のあなたに漂ひつ、夜の闇路に露結ぶ、帆影に覆はれ如何なれバ、早やかくれぬる佛の濱邊ハ」、

いともたのしき佛蘭西よ、いとも可愛ゆき佛蘭西よ、幸も澤なるむつきの中に、はぐくまれにし國なるを、跡に見なして行今ハ、是ぞ此世の辭別」、

佳傳

○破鏈談　"Breaking the Fetters."

みどり

第一回　秋の天

今を距る二三百年前、フランスに新敎の信徒大ひに起り立ちたる時、國王國民ともに之を抑壓して極めて殘酷に迫害したりける、然るに西暦一千五百九十八年に當り彼の尤も貴むべきナンテの布告と云へるもの公けにせられ、凡そ新敎を信ずるものと云ども少か構ひなしとは許されたり、然る處後ち一百年の星霜も斯の如くには過去らて、同じく一千六百八十五年と云年、日輪沒入、彼の公明自由なる布告は取消しと相成

りたり、之れより新敎の信徒は更に古へに倍するの迫害を蒙り、天の睨敎を聽かんとして縛せられ、上帝に祈らんとして足械せられ、或ひハ終身牢に囚われ又たは一生船を押すの奴隸とハ爲されぬ、宗敎史を讀むもの當代の困厄を聞ては誰か之れに酸鼻慨歎せざるものあらん、而うして此の新敎信徒をヒウゲノットと稱す、此の破鏈談は即はちヒウゲノットの鏈を破りたる、最美最麗の佳話を逃ぶるものにして、場所は佛國ニスメ、モントペーリの邊り、時は一百三十餘年前西歷一千七百五十六年以後の事に係はる、悉く是れ實談也。

モントペーリの片田舍に生糸を造る老母あり、マリーと云へる其が孫女は折々此に遊びにとて來るなり、九月の天温たかにして未だ冷やかならず、今日も樂しく之に遊びて遊びがてらに亦た生糸を造ると見へたり、老母は目鏡でしに時々微笑して甚はだ嬉しき如し、マリーは慣れぬ仕事とて一心に繭をほどくの躰なり、傍はらにあつて談笑する少年はジーン、フヘブルとてマリーが約束の夫あり、今日端なく此に音づれて共に遊ぶと見へ、遊びがてらに亦共に生糸を造るとは見へたり。ジーンは繭をほどき作らつくゞゝと見て、さてゝゝ此の樣に屑を多く出して此の屑を何にも使はぬとや實に勿躰なきとぞと云へば、マリーも亦た歎じて眞にかく物を棄つるは最と惜しきとなりと云ふ、ジーンは更らにつくゞゝと見て若し之を何かに利用するの機械を發明せば何如ほどの公益ならんと思切まるに、マリーは密かに其の顏を覗き込み君はよく其樣な工夫を爲さるべくや。出來るとは確言せねど出來さうなり必らず一つ試むべし。然しそのやうな事は最と小さき事に候はずや。固より小さき事なれども凡そ世の人を更に富せ更に善くするの方便あらば何事にても輕んずべきにあらず特に如此きは私しの商賣柄に近き仕事にて尤も爲し易き業なれば公益の爲に數多の生糸製造人を利するの工夫を之より運らし申さんとは思ふ。

談話は之にて止みマリーとジーンは裏手の方に伴なつて少しく運動す、夕日蔭西山の嶺より泄れ、暮雲常ならぬ色どりをして天の景色畵けるが如し、マリーは思はず聲を發して叫ぶやう、嗚呼あの景色の何如に美しきよ、山を見れば嗚呼高きかな、我身の何如に小さきかな、寧ろ人世に生れ出でぬ予人間の幸わひならん。ジーンハ聞咎めて申す、其は實に誤まりたる考なり、眞の思ひにては候はず、人の命ちは固より短かし、人間の居れる場所も亦た地球上の一小點あり、然れ

と萬物の中ち吾々人間の如き仕事を爲し得るものは一つもあらず、吾々もし機會を察し善をなすの場合を見遁すとなくば、此世は遂に更らに立派の世の中と爲るべし、吾々が世に生れ出でたるも只だ此の善業を爲さん爲めなるぞ。然しどうして其が出來ませうか、アナタは生糸の機械を發明して‥‥。半ば言はせず、マリーよ、君は私しが妻とあり、私しの助け手とならるゝ人にはあらぬか、私しには老父一人老婢一人あり家は貧しく仕事も困難ならん、左れど君は私しを助けて吾が室家を幸わひにし、且つ私しに善を爲さしめ玉ふの責任あるには候はぬか。マリーは首べを垂れて恥かはしく、勿論さう仕樣と試みますワ」。

此一日は彼等の爲めに最と短かしと思はせ特に其の名殘を惜しませつゝ暮行たり、ジーンはニスメの家に歸りて之より一心不亂と爲りたり、たゞ其の心を動かすものは日々の營業と、過る日の忘れ難き會合あり、日々の營業は少しも怠りがたければ之を勉め僅かの餘暇を執つて彼の新機械を工夫せり、工夫の思案腦を熱するとき更らに一つの心を動かすものはありつゝ、只だ民を思ひ世を思ふの眞心より一日も早く發明の出來よかしとは祈るなり。

數度たび造り直したる機械も略ぼ出來上れり、尙ほ不完全の所ろは多けれども先づ大躰の工夫は附きたり。玆にラモントと云へる知り人あり、熱心なる大工なり、左れど中々の大望家にて名擧を貪ぼると人並ならず、兼ねて亦たジーンと同じき考を懷きて器械工夫の折柄、或る日ジーンは彼を招きて其の新案を見せたり。固より未だ全く出來上りしにはあらねど扨ては彼處を斯く〱改めたらば或は出來上るべし、此處を斯く改めたらば大抵成就すべしとの目途早くもラモントの眼中に映りたり、之と同時に此の發明の功を彼に奪れなば吾が勞力も空となり、我名擧も徒となる、何如にかして彼を妨たげ吾先づ早く之を爲し遂ぐべしとは思ひ定めぬ。ジーンは其とは知らずたゞ熱心に改良の工夫を相談したり、ラモントは左樣〱と聞流しつゝ同情を持つと云ふ樣姿を飾りたり」。

歸る途にラモントは思ひ着きたり、ジーンは是れ熱心なるヒウゲノットなり、ヒウゲノットの說敎塲祈禱會塲は兼ねて承知したり、何日か時に乘じて彼等が集會するを探り、官に訴へて兵卒を遣はさすれば、一手に捕縛したる中にジーンも必らず捕へられてあるべし、捕へられて少なくとも數ケ月牢に入れらるゝ間だに吾は早く工夫して彼の器械を成就すべし、

左ありくと恐ろしき計略を運らして、天地に跼蹐ともせず吾が家に歸りたり」。

ジーンは人類の自由に據つて神の敎を聞き神に祈るものなり、人類の善心に勵まされて公衆の益を計るものなり、而して彼は其の神の前に跪まづく時に於て、彼が公益を計るの報酬として、將さに迫害の爲に捕へられんとはする也。

小說

○理想紳士

月の舍しのぶ

はしがき

嘗て女學子先生の「理想紳士」と云へる社說四編を讀み、世に斯る紳士のあれかしと切望したり、而してミウロック孃が「ジヨン、ハリフハックス、ゼントルマン」を覽るに及びて、端なくも此に類する一個の理想紳士を得たりける、則はち其大要を摘み、之を本邦の出來事に直し、少さか先生と感を同うするの意を表す、實に是れ女性が理想する紳士の高尙ならんとを祈るが爲めなり、忍識す。

第一回　信用するに足る少年である乎。

旦那の路を開けないか、此の不性もの丶乞…

乞食奴と言掛けて口を鉗みたるに驚ろきたり、元と余が姻たりし時も隨分に八釜しき質なりしが、左りとて餘り非道き事を言ふと哉と驚ろき乍ら、父と共に無言にてありし、然るに此の聲に應じて此方に振向きたる彼の少年を見れば、猿が嚴しき物言を仕たるとの少しは不思儀ならずなりぬ、即ち此の少年は着物は破れ、其上半ば泥に塗れ、極めて憫れある姿ありき、之を乞食と呼ぶとも全くは無理ならずと迄に見られたり。

イヤ少年、左樣に濕なくても宜しひ、私等にも十分場所があるから、貴樣も其處に居るが善い。

云ひつゝ父は余の車を推して庇の方に行けば、彼の少年も進み出でゝ之を推すとを助けたり、其手は眞とに丈夫らしく余程力業を爲しと見へて黑く且つ逞ましき氣あり、余と大抵同年配ならんと思はれたるに、余は推るゝ迄に弱く彼は斯く强よきかと、浦山しく感ぜられたり。

猿は內より聲を掛て、旦那樣お這入なすつて溫たまりなさいませぬか、と招待したれど、余は反つて雨の霏々として落るの樣を眺めたく、特に彼の少年に何となく心殘りして、內には入らずありし。シテ彼の少年を見るに、疲れたるか又は何事をか考ふるなるか、壁にもたれて庇に雨を凌ぎ、道路を切りに

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

眺めて、雨の塵芥を叩き上る、水の渦巻き流るゝ躰を熟視して沈默たり。其時余はつく〴〵と彼が顔を見たる、其の面影今日にても尚ほ思ひ出さるゝなり、五十年後の今日に至りても尚ほ目先にあり〳〵とは見ゆるなり、眼こは深く窪みて黒く、眉毛は鮮やかに引かれ、鼻は尋常にして高し、唇は上下確かに合して決斷の性を現はし、頬は角立ち際立ち、凡そ此なくんば何如なる麗顔だも物足らぬやう思はるゝと云ふ一のシッカリしたる所ろの容貌を現わせり、而して其骨格は前にも云へる如く極めて强壮らしく見へぬ、其の丈夫なる手足、其廣く高き肩、其の健康なる頬、及び其澤々たる濃き髮の毛に至る迄、余に足らざる所ろの者は皆な彼に備わり、彼に備わりて余に無き所ろの者は皆な余が卑弱なるとを證したるなり。

　雨が早く止めば善いにナー。

少年に聞えよとの心にて言ひたれども、彼は勿論無言なり、父はステッキを弄して水溜まりを衝きつゝ、而も近來の營業墓々しからざるとなど思案してか、是亦無言にて何をか考へらるゝなり、父は遂にステッキをグット衝込み、隱しより銀の大ひなる時計を取出せり、此時計は我家中のものゝ恐るゝ所ろにして何となう父が嚴肅なる氣質を吸込みたるやう思は

るゝものなり、即ち法律の如く運命の如く少さかも容赦せずに時刻を示し、一秒間だも誤まらぬものなり。

此雨で二十三分、損をした、文太、どうして家え送らうなア、お前が一處に製造場迄で行つて、そして…

余は頭らを振たり、當時十六歳にして尙ほ斯く父に難義を掛けたるは思ひ出すだに殘念なり。

よし〳〵、夫では誰かを頼んでやらう。

父は兼ねて余が車を工夫し、少し力を入れて推せば獨りで動けるやうに結構したるにてあれど、尙ほ余の爲に心配して余を獨りにて外出せしめ玉へるとなし、左れば此時も亦た誰をか頼みて余が車を推させんと思はれけん、

猿よ、誰か用を聞て呉れる男は居ないだらうかナ、少しの金を遣るが。

猿には聞えざりしと見へし、然るに彼少年は此を聞くと共に、忽ち面てを赤くし、吾知らず前に動きたり、此時余は初めて彼が大に疲れたる、非常に餓えて見ゆるとを認ためたり。

お父さま、

とさゝやく時、彼の少年は全身に力を集め、尙ほ音聲を一つに凝めて、

旦那さま、私しが致したう御座ります、私しでも其の金を頂けませうか。

言葉づき存外に立派にて且つ力あり、破れたる舊き帽子を取り、男らしき恐れ氣なき樣姿を作つて父の面てを見たり、父は嚴密に之を熟視しつゝ、

お前の名は何と云ふ乎。

針葉襄と云ひます。

何處から來たの乎。

米壁から來ました。

兩親は存命してるの乎。

イヽエ。

斯る事を問ひ玉はねば、とれ思ひ乍ら、何かお心のありてならんと考へつゝ扣へたり、父はお心に於ては嘗て苛刻なるとはなかりしが、只だ其の御處行に於て左樣に見ゆるとの間々ありしぞ殘念なる。

何歳になつた乎、針葉襄。

十四です。

何か仕事を仕てるの乎。

ハイ。

何んお仕事を仕るの乎。

何でも出來るとを致します。

余は此の名言を注意して聽居たり。少し過ちて、父は、

ヨシ、夫では息子を家に連て往つて呉れ、スレバ六錢やらう、然し貴樣は信用するに足る少年であるか。

云つゝ之を熟視されたり、其の銳どき眼光に睨まれては常能登市場の放蕩者も震へ上る其の眼光を以て、長く垂る其の上衣の隱に銅貨を聞よがしに音させつゝ、彼を熟視されたり、

余は言ふ、貴樣は信用するに足る少年である乎。

少年は答へず、亦た傍を眺めもせず、之れ大切の時なりと感じてや、其の力を一心に集め、當の攻擊を迎へんとするが如し、即はち彼は迎へたり、遂に之に勝たり、

少年、夫では今ま金を遣らうか。

父は半ば微笑したり、

イエ、仕事を仕ました迄では頂きません。

出しかけたる手を引き、金を余が隱しに落し入れ、父は製造場へ向つて行かれたり。余は其の後ろ影の見へずなる迄眺めたり、其の廣く肥たる肩、温たか氣に被はれたるクエーカル風の上衣、線入れたるヅボン、革づくりの甲掛、廣ろく緣とつたる帽子、帽子の下より垂るゝ長き白髮の毛、皆是れ父を父の在る通りに現はしたり、即はち父は正直ある、尊敬すべき、且つ繁榮なる所ろの商人にてある也、余は父が街道を遙か彼方に行かるゝ迄で眺めたり、愛すると云ふよりも恐らくは寧しろ多く尊敬すると云ふべき所ろの余が善き父を眺め居たり、而して彼の少年も亦た同じく眺め居たりし也。

寄書

○文苑（二）

鈴木弘恭大人撰

水石契久　萬里小路富子

苔むせるいはほハかくて千代やへむ水の心をこゝろまへして

同　田邊朝子

こけむせる岩まの水のすみかへり千代へむ御代の鏡とやみむ

同　池田孝子

さゝれ石の幾世よりかもちぎりけむ露にごりなき淵のま淸水

同　三橋久子

幾千年いはねにかゝる瀧のいとうごかぬ御代のすがた成べし

同　浦早苗子

これも又千歲どちかも岩が根にちぎりをむすぶ瀧のしらいと

同　別府とく子

岩淸水君がみかげの千代かけてうつるいはほハ限りしられず

同　平尾たけ子

常磐なる御代こそしるけれ岩かねに友なふ水のよろづ世の聲

同　又原庫子

千代までとかたく契を結ぶらむうごかぬいはにかゝるま淸水

水石契久　　伊集院幸子
岩かねに音さへ絕ぬ谷みづもかぎりなき世のしるしなるらん

同　　田中幾子
千歲川苔むすいはほゆく水へよろづ代經てもかはらざりけり

同　　奧山歷子
萬代も流れたえせぬたに川にたゞすむいはぞかぎりしられぬ

同　　原やす子
にごりなき御代もろともに谷川のいそへのみづへ澄增りつゝ

同　　後藤花子
神代よりたえせぬにはの石淸水ちきり久しきしるしなるらむ

同　　三條富子
幾千代もうごかぬみ世とかねてよりちきりや結ぶ岩が根の水

同　　大谷惠子
かぎりなき御代のしるしや是ならむ岩はなつたふ谷のま淸水

同　　櫻井翻子
よろづ代にいとゞさかゆくさゞれ石に契りやかけし谷川の水

同　　中村あや子
いつよりの契なるらん岩が根をめぐりて絕ぬやまかはのみづ

同　　關口光子
にごりなき五十鈴川の石淸水すむかぬさへも千代やちぎれる

同　　神田琴子
千代かけていかにめでたく契りけん岩ほも水も常盤かきはに

同　　三浦常子
千歲ふる岩のたきつせおときけばさかゆく御代の仰かるゝ哉

同　　高松よし子
谷川の岩まにひゞくたきのおとへ千とせをかけて流る成べし

同　　長澤榮子
いく千とせ契やかけしさゞれ石も苔のむすかとみゆる池づみ

同　　丸山君子
岩間よりわき出る水もゆたかにて君がちとせの影ぞうかべる

同　　丸山梅子
千代かけてちきりやおきし諸共にながれもあせぬ岩のま淸水

同　　田村啓子
濯がすむ岩にせかるゝ水のおとへちきり久しき千代の聲かも

新報

（此の欄內自由に轉載を許す）

○當二月中

二日は節分なり○十三日は庚申○十七日は甲子○廿二日己巳十一日は紀元節にて且つ開闢以來初めての憲法發布あらん○二月二日は明治八年に文部省が女子師範學校を東京に創し也去年二月二日に大日本私立婦人衛生會雜誌第一號出版せらる

○東京婦人矯風會

同會雜誌第十號は、去る明治二十一年間ょ於ける東京婦人矯風の大ひなる出來事を集め報じたり、其主あるものに云く、四月以後初めて婦人矯風雜誌を發刊す、同じく地方に遊說員を派出す○米國婦人禁酒會に會院建築費を寄附す○萬國婦人同盟請願書に同意者の氏名を印して送る○ラマバイ及びライダア二女史を聘して演說會を催うす其他演說會を催うすと數回○本年中入會者三百十三名也

現任役員は

會頭　矢島楫○副會頭　荻野吟○通信書記　元良米○
會計　本多孝、井深せき○雜誌委員　淺井柞、佐々木豐壽

○學士スピンチル氏、天下の女子

天下の女子と云ふ演題にて、以後每月水曜日に本鄉弓町一丁

目二番地壹岐殿坂會堂に學士スピンチル氏の講演あり、同氏が女學に對する持論及び執心の事は前號に於て畧言したり、今後毎水曜日に女學上の講話を催うさるゝと云ふと其の厚志實に謝すべき者也、今ま豫定の分數回の演題を左に掲げ、貴婦人紳士諸君の行て傍聽せらるべきとを勸む。

二月六日　ペルシアとマロッコの間に住むマホメット教を奉ずる婦人(演者の實地視察を基礎とす)
同十三日　アフリカの婦人、奴隷
同二十日　北アメリカの印度婦人
同廿七日　南洋諸島特にニウジーランドに於る婦人
三月五日　印度婦人　甲 處女、結婚、世帯　乙 寡婦、寡婦燒殺、年齢

吾人は其都度に大意を筆記して女學雜誌上に掲載すべし。

○白皙人の褐眼

日本人は全身白皮症に罹らざる限りは決して碧眼あるものなし然るに西洋婦人を妻とせる日本人或は日本婦人を妻とせる西洋人は何如なる眼色の小兒を産するや又白皙人中には碧眼の他に褐眼あるや否やの問題は人類學上多少の必要あるものにして今まメヂカル、クロニクルの報ずる所ろに據れば歐洲に於ては褐眼は婦人に見るとあり兩親同色の眼を有するときは其兒の眼色も兩親に同じきと百中の八十八に居り兩親の眼色同じからざるときは其兒褐眼を呈すると百中五十五の割合ありと云ふ。と衛生會雜誌第六十八號に見ゆ。

○流行の破船

巴里の流行一變すれば其舊裝を魯西亞瑞典に送るを以て常となす。一年其品々を積てピーターースパーク峽を過ぎし時難風吹來つて船顛覆せり。其翌日漁師は例の如く網を下せしに忽ち白繻子の上衣を着したる鮭一尾印花布の鼻拭を被りたる大口魚二尾を獲たりといふ。シテ見れば海底には新流行の禮服を着したる鮫ども集りて舞踏會を催ふすなるべし。

○女子州會議員當撰

一月二十一日倫敦發ルーター電報に云く、
倫敦州會議員の撰擧に於てサンダースト夫人はブックストンよりコブデン孃はザウより當撰したり。

吾人は實に之を祝する也、去年十一月十七日倫敦エンデレーガーデンのパンチン夫人の宅に於て右州會議員に女子を出すとの協議あり彼のアベルヂーン伯爵夫人主會と爲り、
女子が如此き事に參與せんとするは其の權利を主張するにあらず、實は多くの義務を負はんとする也、彼の貧民養育

院、職業懲治學校、育兒院、の如き凡そ州會に於て協議する事件が彼の女性の相談なき爲に如何に多く混雜失敗して善く治らぬとよ、女子の議員を出さんとするは即ち此等に對して義務を盡さんとする耳、

その主旨にて演說あり遂に第一の議決として前の一夫人一令孃を議員の候補者として差出すとに定め、第二の議決として撰擧入費を募り及び此の撰擧の爲に盡力するの委員を擧てアベルチーン伯爵夫人以下九婦人、並に代言人四名、外二名に委賴し、第三の議決として之は政黨の如何んに關せざるものとし本日の議決を婦人改進黨、ブリムローズ、レギウ、ロッヂス等及其他の婦人政黨會に報じて其の賛成助力を乞ふべきとに定めたるとなるが、此の電報にして誤まりなくば遂に勝利を得て當撰したりと見ゆる也。

因に云ふ、右コブデン(ゼーン)孃とは彼の米律廢止の大運動に率先したるリチヤードコブデン氏の令孃にて千八百八十三年リーヅの婦人大會以后常に女權論率先者中の主なるものとなれり。

○不道德なる著書、特に小說

不道德ある著書の出版及び販賣を禁止すべしとの叫びは、万國を通じて彌よ高くなり、本年はスウイッツルランドに於て此の主意を以て万國の會議を開かるべし。彼の佛人ゾーラの小說の如きは惡小說中の尤も甚だしきものにて、世の道德を害すると實に非常なり、左れば英國に於ても日耳曼に於ても米國に於ても此書の反譯及び販賣を禁じたるとあるが、其本國たる佛國に於て何等の處置を爲さゞるは實に慨歎の至りなりと思ひし、然るに過日の番兵の報ずる所ろによれば、佛民の高等社會に於ては亦た大に之に反對し公德同盟會("League of Public Morals.")と云へるを設立したり、會長には著名の宣敎師著者たる博士デ、プレッセンス氏之に任じ大ひに運動を始め、數多の熱心なる婦人は之に賛成盡力すと聞ゆ。吾人は我國に於ても不道德文書を禁止するの法令は只だ彌よ嚴密あらんとを切望して止まず。

○英國警戒同衆第三年會

本號の植村氏の演說にも見ゆる英國のナショナル、ビジランス、アッソシエーション即ち英國警戒同衆とも云ふべき會に於ては、去十一月廿七日倫敦エキスターホールに於て第三年會を開らきたり、シース侯主會とあり列席の紳士貴婦人數多ある中にも彼のフォーセトト夫人、チヤント夫人、アモス

(二四)

夫人、ガルレット夫人、リッチエット孃、メーソン孃、等を見たり、最初主會者メーソン侯演説の中に、

本會當一年間の事業は叙々として然し乍ら確かに社會改良法の實行せらるゝとを確かめ又た凡そ社會の道德を潸くするには啻に惡風に反對して議論するのみならず併せて之に反對するの運動を實行せねば効なきとを確かめたり。此の一年中の主なる事業は新聞紙上に惡しき廣告を載するとを制止せし事、アルダーショット(兵營の多くある所)に於て二十二の曖昧屋を訴へたる事、諸外國の有權者及び警察官の贊成を得て外國よりして我國に不道德を持來らするとを制せん爲に會員諸外國に遊説して主なる政事家に會合し彼等が熱心なる贊成と共力とを得たるの多き事、特にデムマーク及び和蘭の兩國に於ては我會に通ずるの委員及び通信者等の設けられたる事、國民を改良するには先づ子供を敎ゆるに在り子供を敎ゆるには先づ其母を敎ゆるにありナポレヲンが吾若し佛蘭西の良母を造りしならば全世界に打勝ち得べしと云ひたる如し吾等は全世界に打勝んとにあらず只だ其罪と不潔とを除かん爲に英國の良好の母を造らんと欲し夫には婦人の會合する會に行て極めて簡易に而も尤も熱心に清潔の講話を爲し其の心に道德上の志想を銘するにありと認め則はち其の一事に働らきたる事、安息日學校に働らきたる事、劇場其他遊樂の塲所に使役せられたる子供等敎育の事、如此き事項は今年中に於て吾會員の働らきたる中の重なるもの也。以后吾會員の尤も注意すべきとい、女囚を男巡査に托せざる爲に婦人の牢番を撰ぶに至る事、明年スウイツルランドに開かる不道德書禁止の萬國會合に委員を出す事、訴訟に三ヶ月の限を置くの法令(葢し曖昧屋を訴ふる又は德義上の損害を受たる時訴ふるに三ヶ月を過れば無効なり等云ふの法律ならん)を廢し十六歲以下の小娘に姦したるは惣て强姦に認むるとの法律に對し犯者を辨護するとを無効となし醫療上の物品と稱し風俗を亂るの廣告を爲すとに制限を置く等の三の法令案に贊成し之をして發布せしむるに盡力する事、等なりと云へり。

フォーセット夫人の演説中には左の如き句あり、

現今道德に於ては女子は遙かに男子の上に在り、故に吾々は男子を更らに高めて切めて女子と同樣同等の道德に至らしめ、而して又た男女を併せて一層の高きに進ましめんと、を祈る、余は度々職工の男子中に演説したるが彼等は德義

上の事に感ずるの念實に弱し固より決して女性に及ばず故に女子にして若し國會議員を撰擧するに至らば議員中更らに德義上の事に注意するの人物を得るに至らん。

○篤志看護婦人會　去月廿三日は日本赤十字社篤志看護婦人會の本年の發會にて幹事長小松宮御息所御不例にて御出席在せられず幹事副長北白川宮御息所を始め三條公爵夫人、同令孃、蜂須賀侯爵夫人、佐々木、小笠原の伯爵夫人、清岡、田中、櫻井、松平の子爵夫人、伊藤令孃等會員四十有餘名出席せられ講師足立寬氏火傷、凍傷、溺沒等の救急法を講述せられ就中人工呼吸法に至ては實際を示して深切に講話せられたりと同日裏松子爵夫人其外數名の入會者あり且同會の現在會員は八十五名にて毎會加盟者の增加あるよしなるが同會は各御息所及社員の貴婦人令孃等發起人となり一昨廿年五月中設立されたるものにして社員の婦人は何人を論せず入會を得而して開諭ハ毎月二回づゝなりと云へり。

○歐洲樂大演習　牛込門内の雅樂講習所に於ては去月廿四日午后一時より伶人の歐洲樂大演習ありしが皇族御息所貴婦人等も參會されたりと。

○東京女學　芝區南佐久間町なる東京女學は庭田胤子氏が校長となりし以來生徒も增加し慈光寺晨子氏が舍監となりて寄宿の取締を擔當し生徒と寢食を共にせらるゝより生徒の品行學術とも一層の進歩を見るに至れりと云ふ。

○女教師　來四月一日高等師範學校に於て女子小學師範生小澤しが子、河原さよ子、木村すゞ子、諸井くまの子の卒業するに付き任用望みの向きは五月三十日迄に申出つべし但し俸給は凡十五圓以上なりと去る廿四日府廳より各區役所へ通知せられたり。

○女子教育擴張案の可決　滋賀縣學務課にては女子教育擴張案なるものを編成して去る十九、二十兩日の臨時總集會に提出せしに衆員の賛成を以て可決せられたり。

○京都の赤十字社員　京都府下にては過日來赤十字社員を募り居りたるが追々賛成者入社するものあるにより主唱者は赤十字社京都支部を設くるため其規則の草案を起し去月廿六日盲啞院に於て相談會を開きし由。

○京都婦人慈善會　京都婦人慈善會は去月十九日盲啞院に於て初會を開きしが來會者百三十餘名にして師範學校女子部生徒の唱歌近藤芳介氏が和歌の講釋抔ありて頗る盛會なりし由。

外報

（此欄内自由に轉載を許す）

○ボストンの學務女員　米國ボストンの學務委員（スクールボード）は二十四名にて内三名は女子なり然るに公立學校の半數は女子にて同教員の四分の三は婦人なれば學務委員に女子の列する割合甚ハだ少なしと論ずるものありとぞ。

○スペイン皇子の姆　として雇われたる愛兒蘭の女子ダベンポルト孃は年給五百磅（凡そ二千五百圓）を受るとなるが五年にて任了りしのちも此は一生養老金として給せらるべしと申す。

○女子の職業　アントイチッテ、ブローン、ブラクエルが去年デトロイト婦人會にて讀みたる論文の中に云く、四十年前は數人の婦人の外か家屋外の仕事を執るなどの考へあらざりしに現今は米國中に三百萬の職工女あり、其中三萬四千人は計算役書記曾手等、二百七十五人は僧侶、七十五人は代言人なり。

○バットレル夫人　彼の英國の梅毒檢査條例なして全廢せしむる爲に二十餘年間率先盡力し遂に之をして全廢せしめ今は又昭（ダウン）雜誌を出版して全世界の不正業を除かんとせらるゝジョセフヒン、バットレル夫人の良人カノン、バットレル氏は近頃ろ危篤の病氣なるに付夫人は萬事を擲うち看病せらる故に同夫人に向つて同情を持つべし、之に餘り音信す可らず況して其の答書を要む可らずとは英米より近比ろ着する雜誌に多く注意せられて在る也。

○行狀の一等賞　フレンチアカデミー（佛國大學）は毎年行狀賞なるものを送り出すとなるが、其の去年分には三千フランクの金を第一等モニツン賞金と稱してマルゲライト、パウリン、ラウルト女史に與へたり、女史は元とブリタニーの學校保姆なりしが二十歲の時（二十五年前）其妹を看護せんとてパリに來り之より看病人となり八年間継続したる婦女子を救濟すると共に盡力し且つ兩親に虐待せらるゝ憫れなる子供を保育するに盡力し之に傘を造るとを教へ或は又其の兩親に金を與へて餘りに虐待せざるやう取計ひし等の著德ある人也。

○ウエルス女大學　米國紐育アウロラの同大學は更に建增を初め校長ヘレンスミス孃は先づ礎を打ち本年卒業すべき七人の令孃女生次で之を打ち斯て礎式を了りぬ大統領クレブランド夫人は同校の卒業生なれば其時アルママター（學校を思ふの文）を朗讀したる未曾有の盛況なりし。

○英國政壇の婦人　當今其の尤も有名なるものはグラッドストン夫人、アベルヂーン夫人、ランドルフチヨルチル夫人、メレシア子ビル孃、フホルケストン子爵夫人、レデーサンダルスト、及び近頃ろ新に加わりたるレデーコムプトン等の諸婦人なり。

小供談

（本號余白に乏しく此の欄を省く）

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

孝行は多くの德行の母なり

事を聞くや驚きて急ぎ佛蘭西國に赴き、コルデリア姫に父君の事逐一聞へ上たれば、姫は取る者もとりあえず、急ぎ父君を迎へ奉り、傍に奉事して嬉しく餘年を送らせ給ひたりと云ふ。

右の物語は固より、シエークスピーア翁の自作に相違なけれども、其中には餘程我等の教訓となる節少からずと存ず、レーガンとゴチリル二人の姫は、實に娘として此上なき不順不孝なるものなり、斯る不孝者は何事に當てゝも、決して滿足な婦人となることは出來ぬものなり、其夫に對し兄弟に對し友人に對し、皆失德ばかりならんと思はる、幸にして斯樣な極不幸の兒子は世の中に少なきなれども、子の子たる義務を怠るものは數ふべからざる程あり、又たコルデリア姫の如き令孃も決して尠からず、唯王侯貴人の姫君のみならず、其日暮しの裏店社會の小女にも、孝行娘を多く見るなり、そは兎も角も此書を讀み給ふ御令孃方に、御記臆を願ひ度とは、凡そ兩親に孝行でない方は、萬事に就て善き行爲、譽めべき心立の乏しいもの、又た乏しくなるこことあり、我儕若し一人の娘兒が溫順で親に孝行なりと聞かば、其他のことは別に問はずとも其娘兒の人と爲りを判斷することが出來、又た其娘兒が生長して、一人前の細君とならば如何ならん、母親とならば如何であらうと云ふことは、大抵測量が出來るなり、左れば娘兒等が尤も心掛けべき大切のことは親孝行なり、

兄弟姊妹に對する務め

物語一則

第二　兄弟姊妹に對する義務

或る國に七人の息子を有つ一人の老人ありけり、病危篤となり、今日明日も知れぬと云ふ場合になりければ、息子等は皆彼方此方より集ひ來りて、心を盡して自分等を育て上げたる、父親の臨終を見屆しと其病蓐を圍みて坐したり、そのとき父は息子等を顧みて

余は汝等の斯く集ふを見て喜びに堪えぬなり、なぜなれば余は特に汝等に語るべき一事あり、

と申されければ、息子等は何事ならんと倚一層枕邊近く寄り集りしに、父はストーブの火を焚きつくる用に供せんとて、室の一偶に備へ置きたる、

一束の小枝を指し長子に向ひ、
　あの束を取り、汝の膝にあてゝ、折りて見よ、
と命じければ、長子は固より己の力の及ばざるを知れども、父の命にさからわんも心なしと思ひ、微笑ッゝ立ちてかの束を取り、己れの膝に宛て兩手をかけて、強く之を折らんと試みたれども、中々丈夫にて折れんともせず、父は之を見て
　二郎、汝力一杯やつて見よ
と次男に向ひ言ひければ、次男も一生懸命の力を出して見れども、其效なく、順々と殘り四人の兄弟皆一々やつて見て、遂にまだ十歳許にて小學校に通學する末子に至りけり、固より百本ばかりの一束にて、中々尋常の人の折り得べきものならず、年長の息子等の出來ぬもの、いかで末子の能くすべき、其時父は聲を勵して、
　その束をほどき、汝等銘々一本づゝ取りて折るべし、
と云はれければ、居並びたる兄弟等はいと易きことなりと、皆右の束を解き膝にあてゝは折りしに、見る間に薪の束は、堆く積りて一塊の棒切となりたり、父は之を見て喜ばしげに、言を次て言ふ樣、
　汝等は今いと易しと申せしが、なぜ容易きを知るや、これ一致すれば強く分離すれば弱きと云ふ理に外ならず、束なりしときは汝等の中誰れもそれを折り得る者なかりし、然し之をほどきて一本一本となせば、十歳の小兒も之を折り得るに非ずや、汝等能く此理を考へて、余が此世を逝りし後は互に一致協力する樣心掛くべし、共々立ち、共に結び、共に助け合はゞ、汝等は常に幸福なる生涯を送り得ること必定なり、王侯貴人の家に生れ何不自由なく暮は幸なるべし、されど一家平和兄弟相爭ふを知らざる家族の一人たるは倘幸と思ふなり、兄弟姉妹中惡しき家族に丈夫なる幸福なる家族は之なきなり、

一致すれば強く分離すれば弱し

右の話は西洋のことなれとも、我日本にても、彼應仁以後、戰國亂離の頃に山陽諸國を切從、一方の覇となりたる元利元就臨終のとき、子弟に語げたる遺

兄弟の不和は内亂の如し

訓と同じ主意あり、共に血族の爭の避くべきを示せしものなり、兄弟の不和は内亂の如し、凡そ戰爭と申す者は、如何なる種類に係らず、實に忌まわしきものに相違なけれども、其内にも内亂と申して同國人の間に起る戰爭ほど、惡しきものはなかるべし、英語で内亂のことをシーヴィル、ウォールと申す、ウォールは戰爭の義にて、シーヴィルと申すは羅典語のシーヴィスとて、一個の市人又は國民と云ふことを意味して、居る語より轉じ來りしもので、ローマ人は自分等の都なるローマの城壁の内に住んで居る人民、則ちローマ人同志の間に起りたる爭鬪を稱してシイヴィル、ウオーと申したり。サテ往古より今日に至るまで内亂の多かつた國で滅亡しなんだ國はない位、又た我儕が歷史を繙いて、歐米、支那、日本等の古今變遷興亡の跡を鑑みるに、内亂のことを記して在る部分を見るときは、實に心持を惡くすること屢なり、今日となつて見れば、世界一家と云ふ說の行はれる世の中ゆゑ、獨乙と佛蘭西が龍虎の將に戰はんとする景况だとか、露西亞と

一家の不折合は尤も醜きものなり

支那の關係がドーダとか聞けば、彼の通常の所謂内亂ではなけれども同樣に不快を感ずるなり、然し小綵合でも自國人の間に起る戰爭は、倘強く我儕に不快の感を與ふる樣に覺ゆ、近く日本で云へば、明治七年江藤の亂、同十年西鄉の亂の如き、實に日本人と日本人との折合で、所謂純然たる内亂ゆゑ、假令へ其國財を糜し人命を損ぜし點より論ずれば、彼のナポレオン第一世の戰爭や、又は明治三年時分の獨佛戰爭の十分の一もなかつた位なれども、我儕日本人には遙に西鄉の亂、佐賀の騷動の方が、強く心を痛ましめるのは、一方は國と國との爭で、一方は自國人と自國人との爭ひ、所謂内亂でありしが故なり、

戰爭の中で尤も忌はしきものが内亂である通り、喧嘩の中で尤も心を痛ましむるものは、同じ家族を組立る人の間に起る口論、不和なり、所謂一家の不折合なり、其中で尤も理屈に外れて見ともないのは、兄弟同志の不和なり、親しき親類間の不折合なり、兄弟姉妹の間、不和にして互に始終所謂

兄弟和合の法

しぶつら、ふくれつらして日を送るは、他人が見ても此上なき見にくき景色なり、其れに反して、兄弟姉妹父母親族一和して、互に愛と申す紐にくゝられて一となりたる家、一言の不平さへも聞えぬ家族は、外に見る人の心を樂ましめ、人の志を高め、人を感ぜしむると甚し、孔子の己の欲せざる所之を人に施す勿れと云ひ、若くは基督の汝等人に爲られんと思ふとは其如く人に爲せと云ふ、皆一家內を調和せしむる金誠と申すべし、世間の令孃方よ、あなた方の家を喜ばしく樂しき家と爲したく思召さば、先づ兄弟姉妹を能く愛し給へ、若しもあなたが家の長女で在すなら、先づ手本を出し給へ、さらば弟や妹たちが、それに見傚ひ申べし、若し毎朝學校に通ひ給ふなら、夙く起きて時間前に支度を整へて、快よく出で給へ、されば下の子供たちも喜んで學校に出づべし、小さき者は人の爲るとあすと眞似する故、あなた方が少しのとに怒つたり、大聲したりすれば、矢張其眞似をして、ジレテ直に怒り、又は大きな聲すべし、あなた方の行儀がよければ、弟や妹が見傚ふて能い子とあらん、然らばそれに依りて何如ほど母親の心配を輕くするやも知れぬなり、

富家の令孃は責任尤も重し

近來は女子の教育と云ふ事の大切なると誰しも承知する樣に相成り、父母は勿論、令孃自身も進んで、學校に通學し入塾する樣に相成たり、賀すべきの至なり、是の時に當り、何不足なき家に生れ給ふて、學費も充分に仕送を受け、東京橫濱又は其他の立派なる女學校に寄宿致され、日夜良教師の薰陶を受け、家事に係りなく勉强を專一となさるゝ令孃方に申したし。あなたがたは實に幸福と申すべし、あなた方が其樣なる良き位地に置かれたるは非常の特權を與へられたるなり、權利多いだけに又た義務責任の重いとは普通の道理故、一層奮勵勉學して、一には父母の志に副ひ、二には自ら立、他日妻となり、母となりし時、又其他の事柄に身を委ぬ給ひし時、心を盡て國の爲になる樣に務め給へ、今年正月の初め小供のいろは骨牌を取を見て在りしに、讀手が高らかに「入學費用ハ親ノ汗」と云のを聞き深く感じたり、實に親が辛苦蓄

妻君に告ぐ

學校より成り出られたる淑女にして互に能く相手の性質傾向を吟味せず、唯一時意氣の投合せし目前のことに惑ひ、或は唯伉儷にあるべき人其自身よりは、其人の父兄が社會に位地を占むる人たるの故を以て、輕忽にも、一生の伴侶を撰むの標準とするもの丶多くあるは、嘆ずべきの限なり。

今合性の事を詳論する前に、世の已に夫婦の位地に立ち居らる丶方々にて、充分に伉儷の眞幸福を覺え給はざる諸君に向て、一言の御注意を申したし、諸君の必ず喜んで、御受納あらる丶ことを疑はざるなり。

第一に。兎角夫と氣分合はず、夫は氣はづかしく、常に叱ると、怒るとのみ多くして、ほと〳〵困却し居らる丶妻君に申すべし、汝方に取て最上乘の計畧は夫に從ふと云ふ事なり。諺に「負けるは克ち」と申して、凡そ何人と對するにも、餘り強く他人の機嫌にさからわぬ事也、他人の面を犯して云ふ事は、効力の薄きもの也、先づ其言に從ひ置きて、後にて徐々と其人の過失失錯を指示するときには、必ず其人は納得するものなり。夫婦の間よ不折合のときは、先づ汝方に於て、少しは夫の無理なことを言ふときも、正面よりそれに言さからわぬこと最も大切なり、若し能く夫の命に從ふときは、夫の心も和ぎて、遂には最も喜ばしき日を送る樣になり得べし、夫、如何に無理なことを言ふときと雖とも、自分で必ず其無理な言あることは承知し居るに相違なかるべし、然らば其自分でさへ、無理なることと思ふことにも、妻たるものが快くあしらひ、決して不滿不平の顏色なきを見れば、夫は固より妻を愛すべきもの、又現に愛し居るものなれば、如何で其最愛の妻が無理な取扱を受けて、甘じ居るを永く忍ぶべきぞ、必ずや、後には如何に無理云ふ癖の夫と雖とも、妻に心配苦痛を與ふる樣なることは得爲さゞるに至るべし、サテ其從ふと申しても、仕方がない故に從ふにては、未だ夫をして其非を覺らしむるに足らぬなり、心より喜んで樂んで從ふを要す、斯く申したりとて、夫の命あらばどんな無理非道な事でも、唯々諾々決して命に背く

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

良人に申す

可らずと申すにはあらず、若しや甚しき不道理の言あらば、能く筋道を申して、毅然たる決心を以て決て從ざるの意を示すべし、是爲すべきのとなり、サテ其次には、世の良人方に一言申上べし、汝方は妻を慰め、妻をして又其返報として、是非とも汝方を慰め喜ばしめねばならぬ、と云ふ感情を惹起さしめる樣注意せらるゝと肝要と存ず、然るときは、夫婦間何となく互に責むる樣なる不幸は消失申すべし、若しや妻君にして汝方を慰めると、又は其他の注意に於て不足あり、其れが爲め汝方が始終不滿足に思召さば、決して其不注意不行屆を無暗に咎め給ふと勿れ、若し又た何事をするにも、不性ぶしやうにして困却する妻君を持ち給ふ方は、唯其妻君の心に夫を樂しましめ、喜ばしめねばならぬと云ふ念を起さしむる樣に、始終注意せらるべし、然しそふするには、妻君を叱り咎め責めてはダメなり、最上の方法は一言にて言ひ盡すべし、曰く柔わらかき言なり、やさしき仕打なり然し世間の良人方妻君に過度不注意ありし節何でも叱りさえすればそれにて矯正の出來る者と考へらるゝ方多きは大に僻事なり。

心性の合性と云ふ事

前にも申したる如く、心性の適合ふと及び形躰の適合ふと、共に伉儷の幸福を收むるに必要欠く可らざる者なり、夫の宗教上の信仰道德の觀念が丸でゝなくも、大概其妻と同樣でなくては不都合なり、若し良人耶蘇敎に熱信なるに、細君殊の外佛敎の迷信者ならば、如何で彼のエマルソンの詩中に見ゆる如く、北風朔々颯々雪を送るの夜暖爐の傍夫婦兒女等寄集ひて一杯の茶を煎じ談笑和樂の愉快あらんや、サレバ所謂プラトニツクラツブも必要なり、又多少熱愛の分子も必要なり、一方の人物を高しとし、又は學問見識に感じて互に思ひ思るゝも必要なれども、又人物學問見識とは全く無關係にて一種言べからざる熱愛の夫婦間に存すると必要也、此二元素等分に調合されてある夫婦は、已に幸福あるホームを作り出と疑を容れず。

第一　心性の合性と云ふ事

心性の合性と申すとは嗜好感情癖氣質等に於て夫

と妻と一より十までゝなくとも、大たいの所能く相似て居ることを云ふ人には、種々の傾向性癖もあるものにて、諺にも無くて七癖有つて四十八癖とか、人は實に癖の多き動物なり、百人集れば百種なり、左れば夫婦の性癖氣象が丸で同一と云ふとは殆んど稀なることなり、故に大躰の所相戻る樣でなければそれにて差支なしとせざる可らず、例へば此に一人あり已を省みる周密一言一行も其是非當否を考へて少しも苟もすることなく、人を惠み貧を愍むの情深く、堅き冀望を有す、且つ肉體の愉快幸福よりも心靈の平和を願ひ、良心の譴責を恐るる人ならんか、此人は道德家とも申すべき人なり、今斯の如く宗敎の觀念強く、道念高尙、思想純潔なる人、若し不幸にして種々の行掛より、已むを得ず、以上の性質と全く反對である、妻君を娶りたりと假定せよ、必ず其家は暫くにして不折合不幸の活劇塲と變ずべし、又た信心深き妻君が如何にして、宗敎のことには丸で無頓着、妻の信心を愚弄し、折を見ては妨害せんとする夫と永く睦しく暮すと

家ずきの性

を得ん、又道德家ある良人が如何にして己れと同感を有たず、平生已の主義に合はざる妻君と喜び樂むを得んや、況して其妻が夫の命令す義に搆ひなく、勝手に其最愛の兒女を敎育するを見るに於てをや、又世には已れの故郷或は本國を非常に戀慕ふ人あり、此の如き妻君、若し唯異常なるものを見、珍しき所に遊ぶを好む良人をもつならば、一人は年が年中、機會もあらば、外國にても旅行し、又は內地を漫遊して、名所舊跡を見物し、英雄の古趾を尋ねんなどと心掛け、時を得れば家を離れて出て行かん、一方は兼て住みなれし家に在りて、毎日同じことを繰返すことを却て樂とし、靜に日を送るを喜ぶべし、妻にして夫の意に從はんか、全く己れの嗜好を棄てざるべからず、然らざれば空しく家居して夫の他出に同伴することなく、寂寥の生涯を送らざるべからず、是に於てか夫婦の和樂先づ破る、世間幾多の御夫婦を見るに、轉居好きの夫ありて、所謂席未だ暖かならずして家宅をかへ、烟突未だ黑まずして已に轉居の相談をはじめらる

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

ゝ夫をもち、給ふて、不幸に感じ給ふ妻君もあるやに覺ゆ、

子ずきの性

又た子ずきの性とても云ふべき人と、餘り小供を可愛がらぬ人とあり、今茲に夫は非常の子ずきにして、妻君は子供を切愛すると云ふよりも、寧ろ子供の過失を叱るに失し、折々は手づよく折檻せらるゝと云ふときには、父は常に母の處置に滿足せず、母の方では父が餘り子供を甘やかし過るとて、口返答するともあらん、斯くあれば夫婦の間兎角穩にはまいるまじ、此の如き一家は誠に氣の毒なり、何となれば小供の敎育世話は、重に母親に掛り來るもの故、母親の方が子供ずきであれば、父親は左ほどでなくも濟む位なり、然るに以上の例の如きは、丸で反對の有樣を呈せり、曾て野蠻人種の子に對する有樣を聞くに、母親は俗に申す生みばなしにて、乳はなれの年になれば、父親が重に子供の養育を爲すと云ふ、故に愛情も從て父に多くして、母に少く、子のとに就ては夫婦の爭ひ絶えずと云ふ、其故に米國などにては、父親か子を可愛がり母親がそーでなきより起る夫婦の爭を、ウオール、イン、ゼ、ウイグウハムと申すウイグウハムとは阿米利加土人の住む小屋の稱にて、言ふ心は阿米利加土人の小屋にてもありそうな爭だと云ふとなり、斯る御夫婦は宜しく互に諫め合ふて、小供を育てざれば、大に其子供に害毒を與ふべし、

愛強き性

又誰に對しても、愛情の極めて切なる人あり、已に何人をも愛す、故に其最も愛すべき人を愛する無限なり、斯の如き夫は非常に其妻を愛すべし、斯の如き妻の心には、良人と云ふ思想は常に廣大の領地を横領するとならん、斯の如き人は其男たると女たるとを問はず、已れと意氣相投ずる人を得て友とせんとを欲し、已に一たび友情の成立つや、決して渝らぬものなり、

夫此性を欠く場合

若し妻君此性の非常に發達したる人なるに、良人殊の外冷淡にて、外國に旅行し若くは數日家を去るときも、別に憂ふる色もなく、已に去る、餘ほどの用事でもなければ、一切音沙汰なし、假令へ一封の書折々來るとも、一言も妻君を懷ふの情を言わらはす文句を發見せすと云ふ

廣告

英學經濟學を專門とし漢學獨乙學數學簿記學等に通し十有余年教授に從事したる教師あり出教授を望まるゝ方は左の所へ御談しを乞ふ

下谷區練塀町十五番地

共愛學舍

男女普通禮法

宮中顧問官華族女學校長學士會院西村茂樹君題字
大藏省主税官文學士添田壽一君序
公使館書記官法學士三崎龜之助君校閲
甫守謹吾君編纂

合一冊
袖珍小本
頗美制
定價金二十五錢

一名和洋折衷禮法　廿二年一月二日發賣

定價御送附あれば郵税を要せず

右は座作、進退、化粧、服裝、談話、應對より訪問紹介、書信、會食、新年の諸禮に至るまで今日の交際上に一日も缺く可からざる式禮を細大漏さず記載したるものあり大方の淑女紳士は必ず一本を携帯せざる可からず特に製本極めて美麗あれば御進物には最も適當の品物なり

東京々橋區竹川町拾三番地

共益商社書店

同志社大學義捐金募集取扱廣告

今般同志社大學設立ニ關シテ發起者新嶋襄氏ヨリ其主旨ヲ普ク江湖ニ告ゲ同感人士ノ義捐金ヲ募集被致候ニ就テハ各社ニ於テモ其主旨ヲ翼賛シ右義捐金募集取扱候ニ付篤志ノ諸君ハ多少ニ限ラズ金圓相添ヘ各社ノ中ヘ御申込ミ被成候ハヾ取纏メノ上發起者ニ相渡シ同志社大學設立ノ資金ニ充テ可申候

一金圓御寄送ノ向ハ之ヲ受取リタル社ノ新聞雜誌上ニ其金高並ニ姓名ヲ記載シ別ニ受領書ヲ差シ出サズ
一義捐金額ハ拾錢以上ニ限ル
一本年四月三十日ヲ以テ締切期限トス

報知新聞	報知新聞社
毎日新聞	毎日新聞社
朝野新聞	朝野新聞社
東京電報	東京電報社
公論新報	公論新報社
改進新聞	三益社
東京朝日新聞	東京朝日新聞社
繪入朝野新聞	繪入朝野新聞社
東京經濟雜誌	經濟雜誌社
基督教新聞	警醒社
國民之友	民友社
女學雜誌	女學雜誌社

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

遞信省認可

經濟及統計

本誌ハ經濟及統計ノ學理ト應用トヲ研究シ併セテ其普及ヲ謀ル者ニシテ毎號掲載ノ諸欄ハ左ノ如シ

●論說●講義●飜譯●統計表●雜錄●寄書●雜報

本社ノ客員トナリ名論卓說ヲ寄送セラル、特約アル經濟學家及統計學家ハ左ノ如シ（姓名いろは順）

●文學士 濱田健二郎君
●文學士 和田垣謙三君
●法學博士 米國文學士 田尻稻次郎君
● 高橋二郎君
●文學士 添田壽一君
●文學士 土子金四郎君
●文學士 中隈敬藏君
●文學士 長崎剛十郎君
●文學士 天野爲之君
●文學士 阪谷芳郎君
●東京學士會院會員 杉亨二君

●本社主幹 吳文聰
●編輯主任 横山雅男
●編輯補助 河合利安
●發行者 磯部太郎兵衛

●本誌定價一冊前金八錢
●六冊前金四十五錢
●府外毎冊郵税一錢
●見本ハ郵劵八錢ノコト

●發行所 東京麴町四丁目十三番地 經濟統計社

女子敬愛學校生徒募集

本校ハ主トシテ和洋服裁縫編物及ヒ英語學ヲ敎授ス
但シ時々脩身學及ビ婦女日常ノ心得ニ就キ口授スルコトアルベシ亦タ漢學數學ノ敎授チモ生徒ノ望ニ應ス

芝區兼房町十三番地 女子敬愛學校

發兌

一月。	五日	十二日	十九日	廿六日	
二月。	二日	九日	十六日	廿三日	
三月。	二日	九日	十六日	廿三日	三十日
四月。	六日	十三日	二十日	廿七日	

定價

一册。六錢 郵税。一錢（但府内無郵税）
十册。五十八錢郵税。十錢（同前）
半年分 一圓四十三錢 府外は 一圓六十九錢
一年分 二圓六十錢 府外は 三圓十二錢

廣告

特別廣告は婦女に關する協會會合等の記錄を掲ぐるものにて一切無料とす但し紙面半頁分の廣告を載する毎に右雜誌十部の注文を要し以上半頁分毎に十部増の割合と定む

一行 一回 前金拾錢（廿七字詰）
同 三回以上 一割引
同 六回以上 二割引
十行以上一割引。二十行以上二割引。四十行以上三割引。但し不道德なる事物の廣告は謝絕す有益なる物の廣告は社議の上無代價にて引受く女學に關係ある書籍は一部の寄送を乞ひ相當の廣告をなし且つ本誌に批評すべし

WOMAN'S MAGAZINE.
"JOGAKU ZASSHI."

Price 6 *sen*. By post *yen* 1.69 six months, *yen* 3.12 per annum, in advance.
Edited and Published by Y. H. Iwamoto, at The Jogaku Zasshi Office, No. 8B HIYOSHICHŌ, SHINBASHI, Tôkyô, Japan.

女學雜誌賣捌所

東京神田區淡路町殿々堂○同芝西久保櫻川町萬春堂○同神田區雉子町團々社支店○同神田區佐柄木町東海堂○同日本橋區新葭町頁明堂○同京橋區木挽町壹丁目萬字堂○同本郷區元富士町盛春堂○同本郷區春木町二丁目解明堂○同本郷四丁目文壽堂○横濱住吉町角田早貞○同太田町三丁目萬字堂○同日月堂○同本町六丁目日の出屋○京都四條通小橋西へ入漆集光堂○同三條通東洞院西へ入クリスチアンボード○大坂備後町四丁目岡島支店○仙臺國分町十五番地伊勢安雜誌部○宮城縣仙臺大町木村文助○尾張國名古屋本町○石版社○出雲國松江新町盛進堂○廣島縣大手町一丁目早速社○長崎酒屋町虎與號○江州彥根西内大工町新々堂○相州小田原緑町石壽堂○上州高崎田町煥乎堂○土佐國高知本町三丁目樂園堂○熊本文明堂

明治二十二年二月一日印刷
明治二十二年二月二日出版

發行所 東京京橋區日吉町八番地 女學雜誌社

編輯兼發行者 東京京橋區日吉町八番地寄留 巖本善治

印刷者 東京芝區源助町十一番地寄留 森田豐

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

遞信省認可

經濟及統計

本誌ハ經濟及統計ノ學理ト應用トヲ研究シ併セテ其普及ヲ謀ル者ニシテ毎號掲載ノ諸欄ハ左ノ如シ

●論説●講義●飜譯●統計表●雜録●寄書●雜報●

本社ノ客員トナリ名論卓説ヲ寄送セラル、特約アル經濟學家及統計學家ハ左ノ如シ（姓名いろは順）

●文學士 濱田健二郎君
●文學士 和田垣謙三君
●法學博士 米國文學士 田尻稻次郎君
● 高橋二郎君
●文學士 添田壽一君
●文學士 土子金四郎君
●文學士 中隈敬藏君
●文學士 長崎剛十郎君
●文學士 天野爲之君
●文學士 阪谷芳郎君
●東京學士會院會員 杉亨二君

●本社主幹 呉文聰
●編輯主任 横山雅男
●編輯補助 河合利安
●發行者 磯部太郎兵衛

●發行所 東京麹町四丁目十三番地 經濟統計社

●本誌定價一冊前金八錢
●六冊前金四十五錢
●府外毎冊郵税一錢
●見本ハ郵劵八錢ノコト

女子敬愛學校生徒募集

本校ハ主トシテ和洋服裁縫編物及ヒ英語學ヲ敎授ス但シ時々脩身學及ビ婦女日常ノ心得ニ就キ口授スルコアルベシ亦タ漢學數學ノ敎授ヲモ生徒ノ望ニ應ス

芝區兼房町十三番地 女子敬愛學校

發兌

一月。五日 十二日 十九日 廿六日
二月。二日 九日 十六日 廿三日
三月。二日 九日 十六日 廿三日 三十日
四月。六日 十三日 二十日 廿七日

定價

一册。六錢 郵税。一錢（但府内無郵税）
十册。五十八錢郵税。十錢（同前）
半年分 一圓四十三錢 府外は 一圓六十九錢
一年分 二圓六十錢 府外は 三圓十二錢

廣告

特別廣告は婦女に關する協會會合等の記録を掲ぐるものにて一切無料とす但し紙面半頁以上半頁分毎に右雜誌十部の注文を要し以上半頁分毎に十部増の割合と定む

一行 一回 （廿七字詰） 前金拾錢
同 三回以上 一割引
同 六回以上 二割引

十行以上一割引。二十行以上二割引。四十行以上三割引。但し不道德なる事物の廣告は謝絶す有益なる事物の廣告は社議の上無代價にて引受く女學關係の書籍は一部の寄送を乞ひ相當の廣告をなし且つ本誌に批評すべし

女學雜誌賣捌所

東京神田區淡路町暇々堂○同芝西久保櫻川町萬春堂○同神田區雉子町閒々社支店○同神田區佐柄木町東海堂○同日本橋區新葭町貢明堂○同京橋區木挽町壹丁目萬字堂○同本郷區元冨士町盛春堂○同本郷區春木町二丁目解明堂○同本郷四丁目文壽堂○横濱住吉町角田屋貞○同太田町三丁目萬字堂○同日月堂○同本町六丁目日の出屋○京都四條通小橋西へ入淨集光堂○同三條通東洞院西へ入クリスチアンボード○大坂備後町四丁目岡島支店○仙臺國分町十五番地伊勢安雜誌部○宮城縣仙臺大町木村文助○尾張國名古屋本町石版社○出雲國松江新町盛進堂○廣島縣大手町一丁目早速社○長崎酒屋町虎與號○江州彦根西内大工町新々堂○相州小田原緑町石壽堂○上州高崎田町煥乎堂○土佐國高知本町三丁目樂園堂○熊本文明堂

明治二十二年二月一日印刷
明治二十二年二月二日出版

發行所 東京京橋區日吉町八番地 女學雜誌社

編輯兼發行者 東京京橋區日吉町八番地寄留 巖本善治

印刷者 東京芝區源助町十一番地寄留 森田豐

WOMAN'S MAGAZINE.

"JOGAKU ZASSHI."

Price 6 *sen*. By post *yen* 1.69 six months, *yen* 3.12 per annum, in advance.

Edited and Published by Y. H. Iwamoto, at The Jogaku Zasshi Office, No. 8B HIYOSHICHŌ, SHINBASHI, Tôkyô, Japan.

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY